

～患者団体向けインフォメーション・セッションを開催～

＜“相手に『伝わる』コミュニケーション能力”の実践的なスキルアップを目的に、  
『メディア・トレーニング』を実施＞

講師として危機管理・広報コンサルタントの平能哲也氏を招聘し、緊張感のある模擬記者会見等を展開

日時：2013年9月5日(木曜日)

場所：TKP 市ヶ谷カンファレンスセンター

PhRMAは、日本の患者の方々への支援活動の一環として、去る2013年9月5日(木)、関東近郊の患者団体の代表者の方々等を対象に、本年度2回目の「インフォメーション・セッション」を開催しました。今回は、前回の「[ディベート・トレーニング](#)」に続き、ワークショップ形式にて、“相手に『伝わる』コミュニケーション能力のスキルアップ”を目的に、専門家による講義や模擬記者会見等を通じて、世論形成に大きな影響力を持つマスメディアとのコミュニケーションのあり方を研修する『メディア・トレーニング』を開催しました。

2011年以降、PhRMAでは、当セッションを通じて、患者団体参加者の方々へ、他国の医療制度や保健制度の実情、そして日本の患者団体による医療政策に関する提言・参画事例を紹介する講演や、ディベート・トレーニング等、実践的なワークショップの機会を提供しています。今回は、今後、患者団体の方々が、日々の活動の発表や問題提起などについて、社会への影響力を持つ「メディア」の特性を理解して頂いたうえで、メディアを通じて社会に向けて「発信」する機会に、より一層大きな影響を及ぼすことができるよう、『メディア・トレーニング』を実施。また、実際に、関係各所へのアプローチや折衝活動を行う際に役立てられるスキルの習得機会として、「わかりやすく伝えること、そして確実に“相手に伝わる”こと」に主眼を置き、実践的なスキルアップを図ることを重視したプログラムとしました。

### 【講義『メディア対応の基本』】

まず、冒頭では、危機管理・広報コンサルタントの平能哲也氏が、『メディア対応の基本』として、報道の種類、ニュース性の要素、記者対応の基本について、具体的な実例も挙げて講演しました。

講師・平能哲也氏



講義風景



## 【模擬記者会見・質疑応答】

その後、事前の申し出に基づいて選ばれた患者団体 2 組の方々が発表者となり、それぞれ模擬記者会見を実施。発表者以外の参加者には、その発表を聞く記者役に扮してもらい、発表の評価点、課題点を考え、記録することで、各々の団体が実際に発表の機会を得た場合に、この経験を生かして頂けるようにしました。さらに、発表後は事前に講師と事務局で作成した「想定される質問」を記者役から発表者へ投げかけ、実際の記者会見の場ではどんな質問がされるのか、実践を通して学んで頂きました。

### 模擬記者会見・質疑応答① 風景（山梨まんまくらぶ）



### 模擬記者会見・質疑応答② 風景（日本IDDMネットワーク）



## 【模擬記者会見への感想発表・ビデオ検証】

模擬記者会見の後は、2 団体の発表に対して、評価点、課題点についてのコメントを、記者役を担当した参加者より発表。発表側、記者役側の双方とも、記者会見でのわかりやすい伝え方、資料の見せ方の工夫などを考える機会となりました。また参加者全員が、考えたことを言葉にして表現することにより参加意識が高まり、一層真剣に集中する様子が伺えました。

その後、「模擬記者会見」の録画ビデオを再生し、講師より講評を実施。発表内容の構成や、発表資料の視覚的な部分の改善方法、受け答えの際の言葉の選び方、態度や姿勢に至るまで、具体的に講評しました。

### 模擬記者会見への感想発表 風景



## ビデオ検証 風景



### 【講義 『効果的に相手に伝わるスピーチ、回答のポイント』】

最後にまとめとして、平能講師より、『効果的に“相手に伝わる”スピーチ、回答のポイント』と題して、2 度目の講義を実施。相手に届くわかりやすいスピーチのポイントや、記者からの印象を悪くしない態度の取り方、回答が困難な質問を受けた場合の対応方法や、記者会見で使用する資料の作成のコツ、そして近年急激に利用が活発化するソーシャル・メディアの活用の注意点に至るまで、幅広く説明しました。

## 講義風景



今回は、16 団体 28 名の患者団体の方々が参加。参加者からは、「今まで気付かなかったような点が発表・応答のポイントになっていると知った」、「聞き手の視点を持つことの大切さが分かった」等の声が聞かれました。また、「すぐに日々の活動に活かせる内容が多数あった」、「本当に自分が伝えたいことは何かを考え直すきっかけとなった」等、今後の活動につながるコメントが数多く寄せられました。